

A Challenging Job

明日へ 未来へつながる農業⁽²⁸⁾

大きな投資を行うよりも、輸入飼料を買ったほうが安いのは確か。でも近年は中国やインドで食料需要が急増し、円安で飼料価格が高騰するなど、輸入に頼るのはリスクも高い。適正な規模でできる限り自給率を高めたいですね」と話します。



地元産飼料で日本一の乳牛を

酪農家 吉川正志さん(飯田市下久堅)

日本一のファミリーを目指して

吉川さんは共進会(コンテスト)などを通じて乳牛の改良促進に取り組む「長野県ホルスタイン改良同志会」の会長を務めており、自身も日本の乳牛を創りだすのが夢。北海道の競り市に参加したり、国内外の優れた受精卵を取り寄せたりしています。7年ほど前には、雌牛が約90%の確率で生まれる「性別精液」を飯田下伊那で初めて導入しています。酪農家にとって牛のおなかは財産。確実に雌を産ませることで牛の改良の効率化が期待されます。

自分の手で理想の乳牛を作り出し、自家栽培の飼料で育てたい。そんなこだわりの酪農に取り組んでいるのが飯田市下久堅下虎岩の吉川正志さん(51)です。

吉川さんは創業60年を超える酪農家の2代目。中学生のころから牧草地でトラクターを乗りこなし、農業系専門学校を卒業して迷わず家業を継ぎました。現在飼育しているのは子牛や肉牛を含めて約100頭。うち、搾乳できる親牛が約60頭います。

吉川さんは下久堅と上久堅に合計12haの農地を確保し、飼料用コーンと牧草の二毛作を行っています。トラクターハイ大型の120馬力のものを含め計5台を使い分けるなど、規模は飯田下伊那随一。機械化によって畑作業はほとんど一人で行える環境を整えています。

「大きな投資を行うよりも、輸入飼料を買ったほうが安いのは確か。でも近年は中国やインドで食料需要が急増し、円安で飼料価格が高騰するなど、輸入に頼るのはリスクも高い。適正な規模でできる限り自給率を高めたいですね」と話します。

家庭と農家を結ぶリサイクル発酵堆肥「ゆうき一番!」

2004年に飯田市下久堅に完成した「飯田市堆肥センター」は、市やJAみなみ信州などが出資し地元酪農家5戸が社員となっている「(有)いいだ有機」が運営しています。堆肥の原料は牛ふん、飯田市中心市街地の家庭生ごみ、キノコ廃培地。これらにおがくずを混ぜ、二段階の発酵を経て年間1800~2200tの堆肥を生産しています。

酪農家の飼料畑に還元されるほか、「ゆうき一番!」の商品名でJAみなみ信州管内市販されています。酪農家からは、無処理の畜ふんを使っていたころよりも飼料用コーンの収量が上がり、化成肥料も減らすことができたと喜びの声が上がっています。社長の松沢武志さん(58)は、「一般のお客さんからも『においが少なくて使いやすい』と評判ですよ」と胸を張っています。

▲できたての発酵堆肥は熱くてふかふかしています
◀家庭菜園用としても人気の高い「ゆうき一番!」

記事に関する問い合わせ
●飯田市農業振興センター ☎0265・21・3217

ホルスタインは、乳をたくさん出して良い雌をたくさん生み、丈夫で長生きするのが理想。優れた形質は体型にも現れるため全国的にも共進会が盛んに行われています。優秀な成績を收めれば、その卵子や子牛には大きな価値が生まれます。優れた血統のファミリーを作れるかどうかに牧場経営の夢がかかっています。

前回の全国共進会で優勝したのは親子三代、創業100年を超える北海道の酪農家でした。「いい牛をつくるには牧場としての歴史も必要。ぼくの代で日本になれなくとも、息子やその次の代に期待したいですね」。現在高校生の長



▲下久堅の畜産団地に広がる吉川さんの畠。一帯は北海道をほうふつとさせる景色が広がります



▶飯田下伊那では唯一という120馬力トラクター。これを含め5台のトラクター、さらに緊急時用の発電機もそろえています